

小林信一さん：私の人生を変えた人

大阪大学名誉教授／科学技術振興機構社会技術研究開発センター長

小林 傳 司

結構面倒な事柄

お互いにありふれた苗字なので仕方のないことではあるが、識別の際には名前を使わざるを得ない。共通の知人たちは「信一さん」、「傳司さん」（通常「でんじさん」と呼ばれているが、正しくは「ただし」）と呼んでくれている。しかしたまに「ダブル小林」などといわれることもある。漫才師ではない。結構面倒な事柄なのである。

ということで、以下、「信一さん」と表記することにしたい。

お互いの専門性をどのような粒度、あるいは距離感で眺めるかによるが、少なくとも理工系の方々や官僚の方々からは、われわれ二人の識別が困難なようである。そして、確かにこれは理解できるように感じている。しかしそれは最近のことであり、かつて二人には明瞭に識別可能な専門性の違いがあった。そして、私の方が信一さんの専門性に引き込まれていった、というのが事の本質である。以下に述べるように、私の人生は変わっていった。私は2020年に定年退職を迎えたが、信一さんもついに定年退職ということで、二人の関りについて振り返ってみようかと思う。

とんでもない経歴

日本の職業構造としての年功序列、終身雇用制度、人材の流動性の低さなどは夙に指摘されることである。信一さんはそれをすべて覆して生きている。私の知る限りで信一さんの経歴を見ても、電気通信大学、NISTEP、筑波大学、社会技術研究システム、産業技術総合研究所、浪人時代、国立国会図書館、広島大学高等教育研究開発センターそして副学長、というありさま。とんでもない経歴である。手続きだけでもくらする。

なぜ、こういう生き方ができるのか不思議でならない。相当に精神的にタフなのだろうと思う。しかし、個人的な資質に加えて、取り組んでいる学術分野の特性もあるのではないかと思う。おそらく、日本に絶対必要な分野でありながら、研究者数が極めて少ないところを歩いているのが信一さんと言える。高等教育論と科学技術政策、あるいは学術政策が信一さんの専門性の一部であろうが（おそらくご本人は、「いやもっと広いよ」と言うに違いない）、これらの領域で多数の論文を発表するのみならず、各種の実践的活動もしてきている。社会にとって科学技術が果たす役割が大きくなるにつれて、高等教育論、学術政策論は科学技術に関する一定の理解がなければ取り組めなくなっている。しかしこのような分野は広い意味での政策論の一部とみなされ、人文社会科学系の訓練を受けた人が担ってきた。そのため、どうしても科学技術への言及が表面的なものにならざ

るを得なかった。しかしこのような議論の需要は拡大する。そこで信一さんの見識がいたるところから求められることになったということであろう。彼はまさに、科学技術の在り方についての現代的「相場観」を持つ人だからである。

STS 研究と信一さん

STS とは Science, Technology and Society あるいは Science, Technology Studies の略称である。日本語では、一応「科学技術社会論」と訳することが多いが、「科学論」あるいは「科学技術論」という表記が使われることもあり、必ずしも安定はしていない。

私は、STS に対しては英米系の科学哲学の研究をしている中から接近していった。トマス・クーンの影響から、科学哲学と科学史の融合のような研究が1970年代ころから進み始めていた。そして徐々に、現代の科学技術のありようそのものについての人文社会科学研究や中等教育、高等教育における科学技術教育の刷新といった議論に目を向けていた。しかしこの研究スタイルは、明治以来の典型的な洋学摂取モデルであり、日本の科学技術の現実と必ずしも結び付いた研究スタイルではなかった。

1993-4年と英国滞在の経験をしたことがきっかけになって、私は洋学摂取モデルから離脱しようと考え始めていた。そして、哲学というディシプリンの当時の常識としての「非実践性」に飽き足りない思いを抱いていた。そこで、市民参加型テクノロジーアセスメントである「コンセンサス会議」（もっともこれもデンマーク由来のものではあったが）を実践してみたのであった。

おりしも1998年に「科学技術と社会に関する国際会議 - International Conference on Science, Technology and Society -」幕張メッセ国際会議場、広島国際会議場、けいはんなプラザの三か所で開催された。STS に関する日本初の国際会議であった。組織委員長に村上陽一郎先生を据え、実行委員長に信一さんが座っている。この国際会議の実施に当たって彼がどれほどの労力をかけたかを目の当たりにし、心から尊敬の念を抱いた記憶がある。私はけいはんなプラザでの公開シンポジウムで、「遺伝子治療を考える市民の会議からの報告」として、直近で実践したばかりのコンセンサス会議について報告をした。これがきっかけで、私は STS 研究を本業にし始めることになったのである。

信一さんと出会ったのは、この前後だったように記憶する。当初は洋学受容モデルで生きており、実践的課題に距離を置くことを美德とする哲学の文化に染まっていた私には、政策研究といった政治や実践に近いところにいる信一さんに一種の違和感を覚えたことを記憶している。工学系の人々や官僚との付き合いも持っているんだと少し驚いたものである（とはいえ、今は私も同じ状況になっているが）。しかし、なぜか信一さんの話は面白かった。面白いとしか表現のしようがないのだが、私の全然知らない世界について、学者らしくシニカルで知的な議論をするスタイルに引き付けられた。

当時細々と若手が取り組んでいた STS 研究。日本のアカデミズムでは異端視されていた。実践的で、ポリティカルな志向が強く、ディシプリンの構造が弱い。科学技術「論」を「学」がないと

揶揄されたものである。だから若手が興味を持つのはわかるがほどほどにね、というアドバイスがシニア世代の研究者から寄せられることもあった。

しかし信一さんは、この分野に関する国際的な動向や国内の状況調査もしていたのであった。テクノロジーロジアセスメントの重要性についても早くから指摘していたし、それがのちの国会図書館での仕事になっていく。

STS 学会設立とその後

この国際会議後、日本でも STS に関する学会を作ろうという議論が起こってきた。もちろんこの議論の中心の一人は信一さんだった。もう一人の仕掛人は先に述べた国際会議でプログラム委員長を務めた中島秀人氏である。いよいよ学会を設立するべしとなって、初代会長をどうするかで議論になったそうである。そこで信一さんの鶴の一声「傳司（でんじ）さんだな」が私の命運を決めたのであった。当時名古屋にある私立大学の南山大学にいた私には、まさに青天の霹靂であった。それこそ相場観からすると、旧帝大の方のお仕事でしょという気分だったのである。中島秀人氏が会長就任を求めて私の研究室に現れた日のことを、昨日のこのように覚えている。こうして、2001年に科学技術社会論学会が設立された。

この年には、科学技術振興事業団（のちの JST）と日本原子力研究所と連携して社会技術研究システムが設立され、研究公募も始まっていく。信一さんはこの社会技術研究システムの設立と運営にも一時期かかわっていたように思う。のちにこのシステムは社会技術研究開発センター (RISTEX) に改組されていき、STS 関係のファンディングも行うようになる。

科学技術社会論学会設立、RISTEX につながる一連の STS 研究振興策立案の裏には常に信一さんがいた。科学技術社会論学会の学会誌出版元の紹介も信一さん、私の編著になっている『公共のための科学技術』の版元の紹介も信一さん。日本の STS を支え、黒子として働いてくれたのが信一さんなのだと思う。

こういう交流を通じて、私は信一さんの知的磁場に引き付けられ、その影響のもとで人生を送り、2021年の4月からは RISTEX のセンター長になってしまった。今は学術会議の会員として、会員任命拒否の問題対応に加え、学術会議改革論議の参謀を務めているが、これも信一さんのおかげだと言えなくもないように思う。なぜなら、こういった問題に対処する際に有効な知識の多くが、信一さんとの交流を通じて得たものだったと思うからである。そういう意味で、信一さんの弟子のひとりとして、私はまあまあ優秀だったのかもしれない。

ありがとうございます、これからもよろしくお願いします。困ったときには信一さんに相談、が習性となっているのだから。

最後をお願いを一つ。いろんなところで書いた論文をまとめて、著書として出版してください。探すのが大変なんだから、読者には。